

医学図書館によせて

脇坂行一

私は1952年より1954年まで英国 Oxford 大学に留学する機会に恵まれたが、Oxford 大学には自然科学関係の総合図書館として Radcliffe Science Library があり、研究の合間にしげしげ同図書館に足を運んで文献の探索や閲読に時を過したのも、今はなつかしい思い出である。Oxford は市街の中心部全体が大学のような街であるが、私達の属した医学部より同図書館までは徒歩でも気軽に行ける距離であり、そこには自然科学の各分野の単行本や雑誌類が豊富に取りそろえられており、私達のような医学研究に携わる者にとっても、たいいてい文献は同図書館で閲読することができ、誠に好都合であった。また館員の数は少なかったが、全部開架式で自由に閲覧することができ、また日没後もおそくまで開館していて、利用者には非常に便利であった。

そのほか Oxford 大学には、有名な Bodleian Library がある。この図書館は1598年 Merton College の Sir Thomas Bodley によって設立されたもので、1605年 James 一世がこの図書館を訪れた時、「余がもし国王ならざれば、余は大学人たらんことを慾す。また余がもし囚人となる心要あらば、余はこの図書館以外の獄に入ることを慾せず、これら善良なる著者達と一緒に繋がれんことを慾す」と語ったという挿話がある。1620年ロンドンの書籍出版業組合は、その印刷するすべての書籍を一部ずつ同図書館に寄贈することを決議し、その後同様のことが British Museum, Cambridge University Library, Library of Trinity College, Dublin に対しても行なわれているという。

以上は少し古い話であるが、現在では科学は日進月歩であり、世はまさに文献情報の洪水時代であるといっても過言ではない。医学関係だけでも、現在全世界で出版されていると推定される医学雑誌の数は約5,000とも6,000ともいわれている。日本で発行されている医学中央雑誌に収録されている日本の医学雑誌だけをみても昭和40年9月で和文誌1,018, 欧文誌118, 合計1,136誌におよんでいるので、実際に全世界で発行されている医学関係の雑誌は上記の数よりもさらに多いものであろう。もちろんこれらの雑誌がすべて質的にすぐれたものであるということとはできないが、現在医学関係の文献探索に最もよく用いられている Index Medicus に収録されている代表的雑誌だけでも1966年で2,500誌におよび、その収録論文数は年間約18万件、1969年末までには年間約25万件に達する見込であるという。このように年々増加する膨大な文献の探索を人力で行なうには、多大の労力と時間を要するので、米国の National Library of Medicine では1964年以来電子計算機を使用する医学文献分析探索組織(Medical

Literature Analysis and Retrieval System, MEDLARS) を開発し, Index Medicus もこれによって作成されている。

京都大学医学部においても, 先に静脩2巻2号で紹介されたように藤原財団, China Medical Board of New York, Rockefeller Foundation 等の援助と関係各方面の努力により, 1965年5月31日医学図書館が完成し, 従来各教室に分散していた図書室が中央化され, 文献複写, Contents service, 他大学医学図書館との間の文献, 情報の交換等種々の面で利用者の便利が増大したことは喜ばしいが, まだ図書館固有の定員が少ないこと, 図書館本来の予算が少ないため, 図書購入費や維持運営費の大部分を各教室研究費よりもちよらなければならないこと等, 医学総合図書館として今後改善されなければならない多くの問題を残している。MEDLARS が日本にも導入されんとしている今日, 上記の諸問題に対しても適切な対策が講ぜられて, 医学図書館が真に大学における医学研究および医学教育の中心としての使命を果たしうるようになることを希望するものである。(医学部教授, 医学図書館長)

図書館商議会の開催

本年度の第1回商議会は, 7月10日午後3時から開催され, 各種報告に引きつづいて, 「附属図書館の将来計画」について審議が行なわれた。

報告事項は, 前年度の活動状況として, 年間受入冊数が17万3千冊, 図書利用人員も4万2千人に達したことが報告された。しかし, 本館予算の伸びがほとんどなかったため, 新しい事業や企画としては, とくに報告すべきものはなかった。そのほか, 本年6月から, 従来全国国立大学図書館長会議と称していた国立大学附属図書館の全国組織が組織を強化するため, 国立大学図書館協議会に改組されたこと, および, 来年5月に, 日米の大学図書館関係者の会議を東京で開催すること等が報告された。

ついで, 議題の「附属図書館の将来計画」としては, まず施設面の問題がとりあげられた。現在の施設では, 増大する図書館利用者に対応しえず, 学生からも座席数の増加について強い要求が出ていた。幸い本館の西隣りに建設中の建物を, 本館の別館として使用することが認められたので, これに特殊資料関係の部屋を移し, 本館1階に第2閲覧室を開設する案について審議され, 原案通り承認された。しかし, 今後の問題として, 全学的な書庫不足を解消するための保存書庫の建設と, 新しい図書館活動の構想の上に立った本館の新営についても, 今後具体的な方策を検討すべきだという意見が出された。

運営の面においては, まず, 宇治地区の5研究所の共同利用の図書館を本館の分館とする件が審議された。そして, 分館構想は結構であるが, 分館の経費・人員等の点について, 今後解決すべき問題があることが指摘された。また, 部局間の相互利用の促進についても了承されたので, 今後本館で部局図書掛長と相談して, 利用上の手続の改善を検討することになった。

整理事務の遅滞はつねに指摘を受けることであるが, 激増する図書の量に態勢が追いつけずにいる。しかし, 洋書の整理に関しては, 米国議院図書館から寄託されている印刷カードを, 全面的に整理事務に利用することによって, 能率化が進められているので, 軌道にのれば, かなりの効果が期待されることが図書館側から報告された。

さいごに, サトラー赤外線チャートの購入が認められたので, これに対する委員会を作ることが了承されて, 商議会を終った。